

旭

# 木曾義昌の墓

## 遺言で椿の海に水葬

旭市網戸のほぼ中央に真言宗智山派の「東漸寺」がある。

中央に五輪塔、本堂両側に宝篋印塔（ほうきょういんとう）、右手の奥まった場所には木曾義昌公の霊廟がある。

文禄二年（一五九二年）高僧・悦道和尚の開基といわれているが、戦国時代の天正十八年（一五九〇年）福島から移封され、下総国網戸の一万石をもらい城主になった殿様で、正式には木曾伊予守義昌。開基二年後の文禄四年に五十六歳で逝去した。

義昌の法名を「東漸院殿玉山徹公大居士」としたので寺の山号を「殿玉山」というようになった。

義昌は平安時代の末期、朝日將軍といわれた源氏一族の大将、木曾義仲十八世の子孫で、夫人は武田信玄の娘万里姫だった。

義昌が網戸へ移封された理由はさだかではないが、一説では木曾氏は織田・豊臣に仕えたが秀吉が小田原攻めするとき、徳川家康の陣に従ったからだという伝承がある。

義昌は文武両道にすぐれ、網戸城主になってからも短い期間に町づくりや新田開発などに目を向け、また花木を愛し、植樹にも関心を持って木々を植えることに努力した殿様だったと伝えられている。

死を前に「武田信玄公が諏訪湖に水葬された」と聞き、これにならつて「私の遺体は椿の海に」という遺言で水葬したが、その場所には供養塔が建てられその由来を記す記念碑がある。

そうして、城内の菩提寺をさらに整備したのが東漸寺で、水葬場所にあるという供養塔は旭ライオンズクラブのほか旭市で整備して公園化し、史跡に指定されている。地域の隆昌を精神的に支えているのが、日本古来からの産土神（うぶすな）とともに「鎮守の森」となっている。

旭市は九十九里海岸に面した平坦の地で、かつて「椿海」として下総台地まで海水が入り込んでいたが、約三千年ごろに、沿岸流と土地の微隆起により台地は平行した砂堤（砂丘）ができあがり、数十本の砂堤のなかで比較的広い地域が旭市中心の成田地区で、現在八区の町内となっている。

最近の調査で、石器時代の後期にあたる石器が太田や十日市場より発見され、砂堤上に原始的な漁業活動や製塩が行われてことが知れる。

更に農業が生活化した弥生時代の石斧が東足洗や江ヶ崎で発掘され、海から椿海湖へと変化したことが地史的に説明されている。